

はじめに

この本は、地元の津南新聞に、
一九九一年から一九九五年にかけて、
「ふるさと記行」として、

連載してきたものを編集したものです。

このたび、出版するにあたり、

「秋山郷の庚申信仰」と

「飢饉で滅びた村々を訪ねて」の二編を加え、
写真および「その後」のことなどを

加筆してあります。



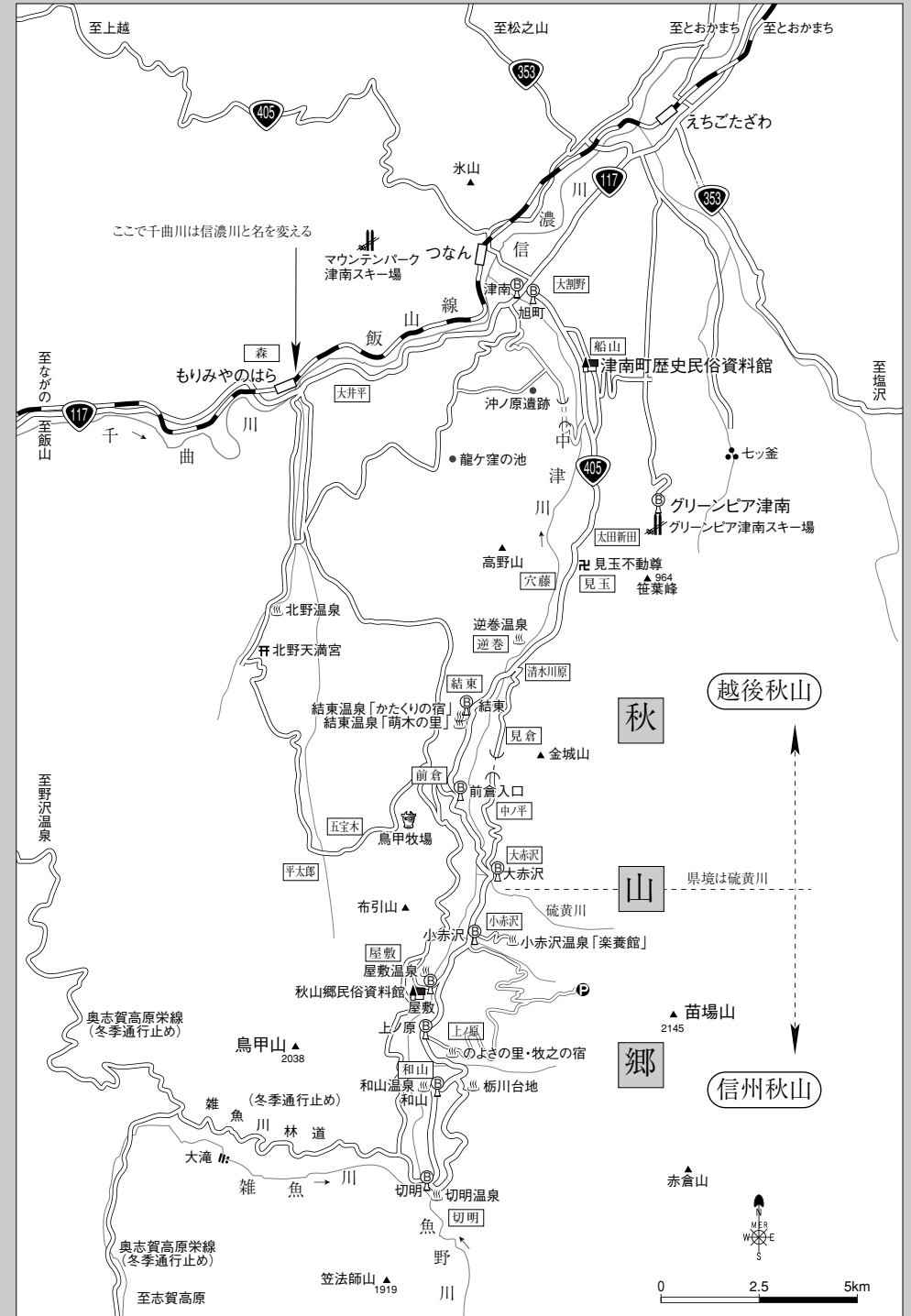
鈴木牧之木像(鈴木牧之記念館／塩沢町)

■ 雪に生かされる日々 三冬目を迎えて

私が冬を雪の中で暮らすのは、今年で三冬目です。それまでは、全く雪の降らない太平洋側で過ごしました。雪国、津南で生まれ育ったかたから見れば、わずかに三冬ですが、三冬だからこそその感慨を綴っておきたいと思っています。

かつて、小学生の頃、日本海側に集中して雪が降るメカニズムを教わりました。しかし、その頃には、津南のような世界でも有数の豪雪地にいずれ暮らすとは思っていませんでした。その後、鈴木牧之が著した雪国の生活風俗の名著『北越雪譜』にめぐり会ったことで、雪国を時折、訪れ始めたのが十五年ほど前のことです。

さて、「苗場山に三度雪が降ると里にも降る」という気候俚言の通り、私の住む秋山郷にも秋深くなると、雪がやってきます。昨年、一昨年と小雪の年が続ぎ、「今年もせめてあ





山斜面の雪庇落とし(前倉橋付近)



山斜面の豪雪は木々の根元を曲げる

冬くり返される雪の力のすごさを感じました。急な斜面には、なだれ予防柵よぼうさくが付けられています。雪のない季節にはわかりませんが、今は、重い雪に必死に耐えて、私たちを守ってくれています。

山間部には、夏には、さほど難儀を感じない傾斜の坂道でも、冬になると、圧雪や凍結によって交通困難な坂道に一変する坂道がいくつもあります。その最たるものが、結東けつとうにある矢平やたいらの坂です。公共交通機関や地元住民から改善の声が強く上がっていますが、今年こそ、その悲願がかなえられるよう、切に願っています。

逆巻さかまき付近では、長いスノーシェッドが断続的に続きます。かつて、秋山郷が孤立する理由は、ここ雪崩多発地帯のためだったようです。昭和五十二年三月、雪崩がスノーシェッドの端を、中津川の対岸まで流し飛ばしていた光景を旅人として見、雪崩の恐ろしさを知りました。

道路除雪はブルドーザで行っていますが、山間部では特に、雪崩を防止する雪庇落せっぴとしという作業が大事なことを、暮らして初めて知りました。

のくらいで」という願いも空しく、前倉まへくらでは二月初めに、すでに昨年より1mは多く、3mを越す積雪となりました。かつての豪雪時には、こんなものではなかったに違いないと想像しながらも、スノーダンプを押しながら、時折、灰色の雪空をながめ、わずかな経験と知識をもとに考えてしまうのです。

ここ三〇年間の雪国の発展はめざましかったようですが、なぜ、もっと早く発展しなかったのか、それは、日本の国土面積の半分は雪国なのに、人口は二割足らずであったためでしょうか。あるいは、「百の顔を持つ」と言われる雪の扱いが、素晴らしい科学技術をもってしても難しかったからでしょうか、等々。

そんなある日、バスの車窓から「雪国ウォッチング」を試みってみました。

秋山郷の前倉入口から津南行のバスに乗ります。

山の斜面に植えられた杉の木の根元が全て下の方で曲がっています。斜面雪圧によるものですが、初めて見たとき、毎



屋根の雪落ろし(結束)



川の水を道路に流し除雪(大赤沢)

太田新田付近では路面を水が流れています。水の豊かな傾斜地で行っている消雪方法ですが、これは元津南町町長の村山正司(大正五年生、任期昭和三十八〜五十三年)さんが考案し、実現したことを最近知りました。

どんどん下って平場になると、道路の中央から地下水が噴き上がって消雪しています。この消雪パイプを初めて見たときは珍しくて、しばらく見とれていました。

いよいよ、終点、津南です。

建ち並ぶ商店のあちこちの屋根からスノーダンプで雪を落としています。落とした雪は、道路の両側にある流雪溝へスノーダンプで入れて流します。昔はコスキ(木鋤)という木製スコップでしたが、今はしめり雪に合った平底型スノーダンプです。素晴らしい発明品だと思います。

ふわふわと降る雪からは想像できないほど屋根雪は重く、スノーダンプで運んでみて、初めてわかったことです。屋根雪は畳一枚の広さに1m積もったとして五〇〇kgといえます。

津南町での道路の機械除雪の始まりは、昭和三十八年です。

それまでは、雪を道路に高く積み上げていました。そんな写真を見ていると、『北越雪譜』に記された江戸時代終わりの世界と余り変わりなく、「カンジキとコスキの時代」のように私の目には映りました。

雪害対策の柱の一つ、道路除雪については、問題は山積みしているというものの、飛躍的に前進したようですが、もう一つの柱、屋根雪処理が、今、最も遅れているそうです。高床式落雪型、融雪型、耐雪型など開発されていますが、車窓から見る限り、まだまだ、屋根の雪落ろしから解放されていません。

消雪パイプのない中津川橋では、ロータリー除雪車が道路の雪を川へ吹き飛ばしていました。雪が美しい弧を描いて川に落ちていく風景が珍しくて、しばらくながめているのは、やはり、三冬目の私だなあと思いました。

日頃、何げなく見ている物に対し、冬にしかわからない価値とありがたさを一つ一つ、改めて感じました。また、発明までの過程と、実用、実現までの道のりの長さを思ったので